

2016年3月6日(日)朝10:10～

受難節・四旬節第4、オリーブ会等

3月第1聖餐総員共同主日礼拝式説教

日本アライアンス庄原基督教会

## 説教題：香油を注がれた主

聖書:ヨハネ 12章1～8節

＜口語訳＞

新約聖書160頁

ヨハネ 12章1～8節

＜新共同訳＞

新約聖書191頁

ヨハネ 12章1～8節

＜新改訳第3版＞

新約聖書203～204頁

ヨハネ 12章1～8節＜塚本訳＞

新約聖書316頁

主題:主イエス様から賜った聖霊の導き

によって主の弟子たちは、主の名による  
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、  
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

◇ヨハネ書は、ヨハネがヨハネ書1章14、18節で記録しているように、「ことばが人となった」**神の御子イエス・キリスト**の証言録です。

◇ヨハネ書12章1～8節では、**イエス・キリスト**様が愛されたラザロ、マルタ、マリヤの家を訪問された時、マリヤがナルドの香油を主の足に塗った出来事を伝えている箇所です。

⇒ヨハネは、**神の御子、主イエス・キリスト**様が、**マリヤの香油注ぎ**を、「わたしの葬りの日のため」と語られたことばに注目させています。

⇒**マリヤ**が、**神の御子の死**を理解して、彼女にとっての最高のささげものをささげたのです。

⇒それは同時に、**ヨハネ**が、**ラザロ**のことに言及(2)していますように、**ラザロの生き返り**への感謝があつたのです(ヨハネ11:38)。

⇒**神の御子の罪の身代わりの死**は、**マリヤ**たちも、十分認識はしていなかったでしょうが、**神の御子**は、**マリヤの香油注ぎ**を受け入れて下さっていたのは、大事な事実であり、**マリヤの思い**を理解して下さったのです。

⇒**神礼拝**は、**マリヤの心**で主に**献げる**ものです。

本論；

◇本日、ヨハネ書12章1～8節から主の使信に  
思い・心をとめます。

◆ヨハネ12章1～3節；マリヤは、自分の大切な香油を主イエス・キリスト様に注ぎました。

◇1～11節；塚本訳◆ナルドの香油

「1 イエスは過越の祭の六日前に(また)ベタニヤに行かれた。ここにはイエスが死人の中から生きかえらせたラザロがいた。

2 するとそこでイエスのために宴会が催され、マルタは給仕をし、ラザロは相伴客の一人であった。

3 そのときマリヤは混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれをふいた。香油の薫が家に満ちた」と、ヨハネは語っています。

◇1～3節；「イエスは過越の祭の六日前に(また)ベタニヤに行かれた」、「ここにはイエスが死人の中から生きかえらせたラザロがいた」、「そこでイエスのために宴会が催され、マルタは給仕をし、ラザロは相伴客の一人で

あった」、「マリヤは混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれをふいた。香油の薫が家に満ちた」と、ヨハネは語っています。

⇒「**過越の祭の六日前**」は、新改訳聖書の注解にありますように、金曜日の日没、ユダヤ人の習慣では安息日に入っていて、**マルタ**らは、**神の御子**と、夕食をともにしたのでしょう。

⇒**主の弟子たちとの最後の食事・晚餐**は、**過越祭の出来事**でしたが、**ラザロ、マルタ、マリヤ**らとの**最後の晚餐**は、**過越の祭の六日前**でした。

⇒「**マリヤは混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油一リトラ(三百二十八グラム)をイエスの足に塗り、髪の毛でそれをふいた。香油の薫が家に満ちた**」と、ヨハネは語ります。

⇒「**家に満ちた香油の薫**」は、「**マリヤの献げた主への愛のかおり**」です。

⇒今日の庄原教会の「**神礼拝**」が、各自の心からの「**混ぜ物のない、非常に高価なナルドの香油かおり**」として、主に受け入れられます。

◆ヨハネ12章4～6節；ユダは、マリヤの献げものことを批判しました。

◇1～11節；塚本訳◆ナルドの香油

「4 弟子の一人で、イエスを売るイスカリオテのユダが言う、

5 『なぜこの香油を三百デナリ(十五万円)に売って、貧乏な人に施さないのだろうか。』

6 ユダがこう言ったのは、貧乏な人のためを考えたのではなく、(会計係であった)彼は泥坊で、あずかっている金箱の中に入るものをごまかしていたからであった」と、ヨハネは語っています。

◇4～6節；「イエスを売るイスカリオテのユダ」が、『なぜこの香油を三百デナリ(十五万円)に売って、貧乏な人に施さないのだろうか。』と言いますが、「ユダがこう言ったのは、貧乏な人のためを考えたのではなく、(会計係であった)彼は泥坊で、あずかっている金箱の中に入るものをごまかしていたからであった」と、ヨハネは、ユダの本心を語ります。

⇒ユダの心・主張は、主の心を離れて、主に仕える心・礼拝の心は、欠落しています。

◆ヨハネ12章7～8節;主イエス様は、マリヤがご自身の葬りの日のための献げものをしたと語って下さいました。

◇1～11節;塚本訳◆ナルドの香油

「7 イエスは言われた、『構わずに、わたしの埋葬の日のためにそうさせておきなさい。

8 貧乏な人はいつもあなた達と一しょにいるが、わたしはいつも一しょにいるわけではないのだから。』」と、ヨハネは語っています。

◇7～8節;「イエスは言われた」、「構わずに、わたしの埋葬の日のためにそうさせておきなさい」、「貧乏な人はいつもあなた達と一しょにいるが、わたしはいつも一しょにいるわけではない」と、ヨハネは、主イエス様の思いを語ります。

⇒主イエス様は、「**過越のささげもの**」として、ご自身が十字架の死を背負うことをすでに自覚しておられる中で、**マリヤの礼拝の献げもの**は、大きな慰めであったことと思います。

⇒主イエス様の**罪の身代わりの死・十字架**は、**神の愛**そのものです。

⇔**マリヤの共感の礼拝**は、**主の宝**でした。

## 結論；

- ◇**神**は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇**ヨハネ書**は、ヨハネが**ヨハネ書1章14、18節**で記録しているように、「**ことばが人となった**」**神の御子イエス・キリスト**の証言録です。
- ◇**ヨハネ書12章1～8節**では、**イエス・キリスト様**が愛された**ラザロ、マルタ、マリヤの家**を訪問された時、**マリヤがナルドの香油**を**主の足に塗った出来事**を伝えている箇所です。
- ⇒ヨハネは、「**ラザロ、マルタ、マリヤとの食事**」を**主イエス様**が楽しまれたことを記さず、「**ユダの自己主張**」と「**主イエス様のナルドの香油を注いだマリヤへのことば**」に特化して語っています。
- ⇒「**過越**」は、**主イエス様**にとって、**ご自身の死**をもって、**神の愛**を示す時でしたが、「**過越6日前**」の時も、「**マリヤのナルドの香油注ぎ**」による「**過越**」への**主イエス様の死**への**共感**は、「**神礼拝の宝**」で、**主イエス様の慰め**でした。
- ⇒**罪のための身代わりの死**を負えない罪人の私たちには、「**マリヤの香油注ぎ**」のように、**神礼拝**に徹する**神聴従の生き方**のみなのです。